

戦争と私

平成二十二年九月五日

はやましゅうけん
奇山 秀憲

私は終戦の年は師範学校の学生で満十九歳であった。学友は次から次へと召集令状（赤紙）をもらって戦場へとかり出されていった。

昭和二十年六月、小生にも予期しなかった赤紙が届いた。六月十七日に大阪第四師団（第二十二部隊）に入隊することになった。出征する覚悟はある程度出来てはいたが故郷（唐崎）をいよいよ出ていかなければならないとなると何か落ち着かない淋しさを感じたものである。出征の当日は村の人々が玉川の里まで送って下さる。「元気でね。きっと帰って来てくださいよ。」とはげまされながら別れの挨拶をした。「それでは行ってまいります。日本の国が戦争に負けることのないようがんばってきます。後に残っております家族のことでもよろしく願いいたします。」最後の挨拶を済ませていざ茨木目ざして出発しようとした時、一人の同期生が「おい、はやま、気をつけて行けよ。」と近づいて私にささやくようにはげましてくれた。彼とは小さな時から仲がよかった。「お前にも赤紙がくるかと思う。気をつけてな。」二人は手をふって別れたのだった。

八月十五日、戦争は終わった。私は兵庫県の竜野に駐屯していた。すぐ復員の命令が出て小生は八月二十二日に無事帰宅した。家に着いて聞かされたことは、あの同級生が戦死したということであった。元気で帰ってこいよとやさしく言ってくれた彼が戦死していたのである。彼は七月に召集を受け、玄海灘で乗っていた輸送船が魚雷にやられ全員戦死となったとの事であった。すぐお悔みに彼の家へ参上したのであったが、出てこられたお母さんは、「はやまさん、うちの子は戦死しましたが…。」と言いつつ、その場にしゃがんで泣き伏された。もう何とも言いようがなく私は逃げるように退出したのであった。私を戦争に送ってくれた彼が死んだ。戦争は何とむごいことをする。私にとって一生忘れられない出来事であった。

話は少し逆もどりするが、第四師団に入隊した我々は、すでに沖縄は落ち、次は本土決戦である。という戦況で我々は鹿児島へ迎撃に行くことになった。鹿児島まで八月の暑い

炎天下を歩いて行くと言うのである。この事が知らされた夕方、小生は隊長室へ呼び出され、小生は先発隊として、他の兵隊よりも先に出発してほしいとのことであった。その夜、寝ようとしたが隣の兵隊が何か泣いているように聞こえる。彼はさみしいのかなとも思ったりしてその夜は眠ってしまった。次の夜も隣の兵隊は泣いている様子である。夜が明けのを待って、彼に何故泣いていたのかと尋ねた。彼は肥満体であった。彼はどう考えても鹿児島まで歩けない。必ず途中で事故を起こすと思うと悲しくなって泣いていたのであるとの事だった。小生も確かに彼の体格から想像して鹿児島まで歩くことは無理だと思った。「よし、わかった。僕が鹿児島まで歩く。君は先発隊で行ってくれ。」彼は大喜びである。しかし隊長が決めたことを変更してくれとは言にくいのではないかと彼は言う。私は隊長に私が歩きますから彼に先発隊員にしてやっていただきたいと嘆願した。隊長も彼の体のことがわかったのか、よし、君と彼とは交代することにする、との許しが出たのである。彼は先発隊員となって汽車で行くことが出来た。竜野の駐屯地で出会った時の彼の笑顔が忘れられない。

復員は八月二十二日に行われ、小生も実家に帰ることができた。

時は流れて五・六年が経ったであろうか。ある日の朝の新聞に「尋ね人」の欄があった。何気なく見ているとあの戦友の名前がある。広島原爆で亡くなったとの事、居住地を知っている人は新聞社まで知らしてほしいとの事であった。私は先発隊を交代したことがすぐに頭に浮かんだ。戦争は悲しい。親切とか優しさは通じない。

このたびの戦争で三百万人近くの人たちが肉親や友人等の親切心、また真心こもった優しさが、どこかへ消え、散ってしまったのかと思うと、戦争を考えることが苦しくなってくる。人間が人間として生きてこそ亡くなられた戦争犠牲者も浮かばれるということになると信じるのである。



合掌